

## 巻頭言

## 大学での「学び」

比較文化学科長 伊藤 健人

大学での「学び」と高校までの「学び」とでは、どのような違いがあるのでしょうか？ 高校までの学びと大学での学びの違い、学びのパラダイムシフト、そして、比較文化学科での学びの特徴についてお話ししたいと思います。

## 高校までの「学び」とは？

例えば、高校までで受けたテストでは、「砂糖と塩はどちらが水に溶けやすいか？」「酸素と水素はどちらが重いか？」「日本最古の武家文庫である『金沢文庫』を設けたのは誰か？」のような知識を問う問題が多く出されたことでしょう。高校までの学びでは、主に知識をどれだけ持っているかが評価の対象でした。つまり、多くの知識を持っている学生は評価が高く、あまり知識を持っていない学生は評価が低いということです。

もちろん知識は重要です。知識量は、どれだけ真剣に学習に時間を費やしたか（どれだけ長く根気強く記憶に時間を費やしたか）を測るには、大きな指針になります。その意味で、知識量が多い人は勤勉な努力家であることは間違いありません。

## 大学での「学び」とは？

しかし、知識を問う質問は、教科書、参考書、事典、インターネット、スマートアシスタント（OK Google! Hey Siri!）を使えば、「砂糖と塩はどちらが水に溶けやすいか？ →答え：砂糖」「酸素と水素はどちらが重いか？ →答え：酸素」「日本最古の武家文庫である『金沢文庫』を設けたのは誰か？ →答え：北条実時」のように、すぐに答えがわかります。つまり、現代においては、知識を豊富に持った“博学、もの知り、歩く辞書、walking dictionary”であることは、それほど武器にはなりません。人間よりも知識を持った道具・ツールが沢山あるからです。

では、知識量で劣る人間が武器にできることは何でしょう？ それは「考える」ことです。知識だけでは答えの出ない問いを考えて解決することです。この「考える力を鍛える」のが大学での学びです。

## 「学び」のパラダイムシフト

ここで重要なのは、「疑問を持つ」ことです。知識を問う「なに？」ではなく、疑問を持つ「なぜ？」ということです。これは学びの「パラダイムシフト（paradigm shift）」と言えます。パラダイムシフトとは、おおむね「今までの考え方や価値観が180度変わる」ということです。つまり、「なに？」という知識を追い求めるだけではなく、「なぜ？」という疑問を追い求めるのが大学での新たな学びです。

## 比較文化学科での「学び」の特徴

「なぜ？」という疑問を追い求める大学での学びへの支援、「考える力」の養成に対して、比較文化学科はどのようなサポートができるのでしょうか？ 比較文化学科では、文化、ことば、文学、思想、歴史などを「比較する」ことで、学生の「考える力」を養っていきます。ここで重要なのは、高校までの知識偏重型の学びを脱却し、答えのない問いに対して、自ら答えを探し出し、わかりやすく伝えることです。これから皆さんと共に学べることを学科教員も楽しみにしています。

## ゼミ連インタビュー

比較文化学科ゼミナール連合の学生諸君が今年度を以てご退職を迎える大内憲昭先生の研究室を訪問し、大学生活の思い出やご専門とされる研究のこと、これまで引率したワールドスタディのこと、色々と尋ねてきてくれました。

### 大内先生に聞く



**Q：先生は今年で定年退職されますが、関東学院大学での生活で一番印象に残っている思い出は何ですか？**

**A：**私が関東学院大学に着任したのは1985年4月ですから、37年になります。着任当時は「文学部」の一般教育（法学）担当でした。2002年に比較文化学科が新設され、「韓国・朝鮮」担当となりました。

37年の教員生活で一番印象に残っている思い出、ということですが、一つを挙げるのはちょっと難しいですね。そこで三つ挙げさせてください。

一つは、2006年に朝鮮民主主義人民共和国からの代表団が迎え、記念講演会を開催したことです。朝鮮の代表団が日本の大学を訪問し、記念講演を行うというのはほとんどありません。朝鮮の哲学・思想を専門とする女性の教授が朝鮮の思想である「チュチュエ思想」に関する講演をされました。

二つ目は、学生（ゼミ連）と教員が共同で主催した「国際シンポジウム」です。中国・韓国を中心に過去6回ほど行いました。その中でも2016年11月の第6回学生国際シンポジウム「東アジアの過去・現在・未来—歴史認識を引き継ぎ若者の課題—」を挙げたいと思います。比較文化学科の学生、中国・韓国からの留学生そして教員（比較文化学科、経済学部）がパネリストとして参加しました。これについては「合同ゼミナール」のアジアグループで取り上げています。

三つ目は、「ワールドスタディ」です。これについては、後の質問にありますので省略します。

**Q：韓国や北朝鮮の研究をしているということから、それに興味を持ったきっかけは何ですか？**

**A：**私の専門は法律ですから学部は法学部です。大学に入学したのが1970年ですからもう50年、半世紀にな

ります。法学部に入学した目的は、司法試験を受験して裁判官・検事・弁護士になることでした。

しかし、大学に入学した「1970年」という年は「大学紛争」「安保闘争」という政治の季節でした。というより、1960年代後半は世界が政治の激動期でした。1966年に中国で「プロレタリア文化大革命」が始まり（～1976年）、1968年にはチェコスロバキアで「プラハの春」、フランスでは「パリ5月革命」、そして日本では「大学紛争」。日本中の大学へ、あるいは高校へと拡大しました。1969年の東京大学入学試験は紛争のため中止となりました。大学に入学したのはいいのですが、前年からの大学紛争の残り火が燻り、そのうえ最大の政治課題である「安保闘争」がありました。またベトナム戦争が激しさを増し、復帰（1972年）前の沖縄の嘉手納基地からは大型爆撃機B-52が連日、北爆（北ベトナムへの爆撃）へと向かっていました。大学内の紛争の残り火は時には燃え上がり、学内では学生同士の対立・抗争がエスカレートしました。そのため授業が正常にできなかつたり、反「安保」闘争のデモ、集会、クラス討論、学生大会が4月から連続でした。このような状況の中で、司法試験という「受験勉強」をすることを断念しました。

学生運動の中で次第に資本主義に疑問を感じ、その分、社会主義に親近感を抱き始めていました。学生運動の中で今まで読んだこともない、マルクス、エンゲルス、レーニンの著作を読むようになりました。「司法試験」を断念した私には「六法」（憲法、民法、刑法、商法…）といった法律は遠い存在になっていました。幸いなことに、「ソビエト法」「東欧社会主義法」「社会主義法」という講義があり、2年生でそれを受講しました。「ソビエト法」は必修科目の「商法一部」の「裏科目」であったため、ほとんど履修者はいませんでした。というより、毎回、1～2名でした。「東欧社会主義法」はポーランドの留学から帰国されたばかりの先生が担当され、「ソビエト法」「社会主義法」はその分野の大家が担当されました。いずれも小人数の授業でした。社会主義を学ぶために経済学部に出向き、「帝国主義論」「社会主義経済論」を受講しました。また第二外国語はドイツ語でしたが、社会主義法、その中心であるソビエト法を学ぶために、人文学部に出かけ「ロシア語」を3年間、受講しました。

大学3年（1972年）から専門ゼミが始まります。私は「憲法」ゼミを選択しました。「憲法」ゼミ担当の先生は（後に50年来の私の指導教授・恩師になります）、その年度から並行して初めて「中国法」ゼミを開設しましたので、「中国法」ゼミも選択しました。

大学院修士課程（今は博士前期課程と言います）では、中国法とソビエト法の比較研究をしました。中国語とロシア語の原文を読む毎日でした。修士論文を書きながら、中国の社会主義にだけ目を向けるのではなく、アジアの社会主義、一番近い（そして遠い）朝鮮にも目を向けるべきではないか、と考え始めていました。そこで朝鮮初級学校に週1回通い、朝鮮語の初歩を習いました。博士課程に進んだ時に、人文学部に「朝鮮語」講座がありましたから、「朝鮮語」を履修しました。

朝鮮には1980年8月に初めて出かけました。それ以来、毎年のように訪朝しています。

朝鮮の法律を研究する以上は、韓国の法律も研究し、南北朝鮮の比較を研究の対象としなければ、と思いましたが、韓国に初めて出かけたのは、2009年8月です。北には1980年、南には2009年、ちょうど30年のタイムラグがあります。これは韓国の政治状況によるものです。韓国はソウルオリンピックが開催された1988年までは軍事政権でした。この政権では「北」に行った人は「南」に入国ができませんでした。

#### Q：実際に先生は北朝鮮へ何度も行かれていますが、初めて北朝鮮を訪ねたときの印象はどのようなものでしたか？

A：朝鮮へ初めて出かけたのは1980年8月19日でした。私は日本の学者代表団（5名）の一員として訪朝しました。朝鮮と日本は国交がありません。唯一の国交がない、未承認国です。「近くて遠い国」ということを実感します。今でもそうですが、当時も成田空港から北京に行き、北京にある朝鮮大使館でビザを取得する必要があります。北京・平壤の間には航空便が週に3便しかありません。それに合わせて北京で1泊します。1泊2日を経験して平壤に到着します。韓国のソウルに行くにはどうですか。3時間もかかりませんね。ソウルから平壤へは300キロもありません。成田からソウル上空を通過して平壤へ直行できれば4時間もかからないでしょう。それが1泊2日です。朝鮮は「近くて遠い国」なのです。

先ず北京を経て平壤に入国しますから、当時の北京は今の北京からは想像できないほど「田舎」です。北京空港から北京市内までの道路は舗装されておらず、砂ぼこりが舞い上がり、北京のメインである「王府井」は雑然とし、清潔感を感じませんでした。そこから平壤に入ると印象は全く異なります。平壤空港は一応は国際空港ですが、日本のローカル空港レベル。しかし、市内までは舗装され、清潔感があり、なによりも静かです（中国に比べれば人が少ないのですから）。それが第一印象でしょうか。夕暮れ時に入国しましたから、仕事場から退勤する人がバスに整然と並び、あるいはとくに平壤市内を一歩出ると、黙々と徒歩で家路に向かう人々を目にしました。当時は交通機関と言えばバス。地下鉄もありましたが、2路線だけでした。

もっとも印象的だったのは、やはり「板門店」でし

たでしょうか。朝鮮戦争の停戦の象徴の場であり、最も軍事的に緊張した場でもあります。その後は何度も訪れることになります。またワールドスタディでは南から同じ場を訪れました。

当時の朝鮮は、1990年代の初めまでは、アフリカ、中南米の研究者が多く来ていました。朝鮮の思想である「チュチェ思想」を研究しに訪朝した人々でした。

#### Q：ワールドスタディでの体験談を聞かせてください（特にカルチャーショックなど）

A：ワールドスタディは2010年、2014年、2019年に実施しました。また経済学部のエ博史ゼミナールと合同での韓国スタディツアーを2014年、2015年、2017年、2019年に実施しています。韓国スタディツアーは学部の「国際交流費」から補助を受けて募集し、審査に合格した学生が参加したり、それとは別個に大内ゼミ単独で参加したりします。

ワールドスタディは毎回、数名の参加に止まっているのですが、2021年度には11名が参加を希望してくれましたが、コロナ禍の中でするので中止せざるを得ませんでした。私にとっては最後の学生とのワールドスタディだったのですが、大変残念です。

ワールドスタディは8下旬に5泊6日の日程で実施しています。ソウルの明洞で遊ぶ時間はありません。ひたすら地下鉄と徒歩で研修場所を回ります。一日2万歩は歩くでしょうか。それも酷暑のソウルです。私にとってはとくにカルチャーショックというのはありませんでしたが、参加した学生さんはどうだったでしょうか。学生が一番興味を示したのは「板門店」参観です。かなりの緊張を強いられたようでした、日本のような「平和」な場所での生活に慣れた学生にとっては戦争が「停戦」状態の韓国の最前線ですから当然でしょう。

韓国スタディツアーは経済学部の林ゼミと合同の研修です。こちらは酷暑の2月に実施しました。関東学院大学と交流校であるソウル郊外にある「韓信大学」の日本語学科の学生と交流し、大学の留学生寮に1泊し、従軍慰安婦のハルモニ（おばあさん）が共同生活している「ナムム（分かち合い）の家」を訪問してハルモニの話をついたり、従軍慰安婦問題の水曜集会に参加したりしています。ハルモニの話は学生にとっては衝撃的だったでしょう。

#### Q：退職後のご予定は何かありますか？

A：今のところ、別段、予定はありません。とりあえず、書齋の本を整理することから始めるでしょう。朝鮮・韓国関係の本以外は整理し処分することになるでしょう。法律関係が処分の対象かな。

授業の準備をする必要がなくなりますので、朝鮮法の研究に専念したいと思います。私の恩師が2020年11月に93歳で亡くなりました。その恩師の50年に渡る教えに報いるためにも、朝鮮法研究を一冊にまとめて亡き恩師に献呈するつもりです。それが当面の目標です。

# 大内憲昭先生の最終講義

本学科教員 鄧 捷

1985（昭和60）年から37年の長きにわたり本学で教えてきた大内憲昭先生は2022年の3月を以て定年退職を迎えられます。大内先生の最終講義は、学部と大学院に分けて、それぞれ1月21日と2月19日に「私と朝鮮」と「私の朝鮮社会主義法研究」を題にして行われました。自らの研究生涯を回顧しながら語った講義はいずれも多くの学生、卒業生や教職員が参加し、大内先生の言葉に耳を傾け、これまでの先生の仕事に大きな拍手で敬意と感謝を示しました。ここでは主に学部の最終講義の様子を紹介しましょう。

最終講義「私と朝鮮」では大内先生が二つの問題について語りました。一つは「異文化理解」と「共生」について、もう一つは「社会主義」についてです。

第一の「異文化理解」と「共生」について、大内先生は黒板に3枚の世界地図（中国作成の地図、EU作成の地図、富山県が作成した環日本海地図）を広げ、視点の違いによって見える世界の違いと、自分・日本の立ち位置を確認し、比較文化学科で学ぶ意義を再確認した上、次のように述べました。

「『21世紀はアジアの時代』と言われてきました。中国はGDPで日本を追い越し世界第2位になりました。1970年代に中国の研究を始めた時には、これほど早く経済発展を遂げるとは予想もしませんでした。お隣の韓国とは「韓流」ブームの中、韓国の文化に触れることが多くなりました。日中・日韓の間に人々の往来が盛んになっています。皆さんもこれから、中国へ、韓国へ出かけて、直接にその地の文化を体験し、人々と接する機会があることでしょう。比較文化学科のキーワードである「異文化理解」と「共生」を実体験することになるでしょう。しかし人的・経済的交流が盛んになってもそう簡単に相手を理解できるわけではありません。現実には、領土問題・歴史認識問題等、日中・日韓の間には越えなければならない問題も多くあるのです。比較文化学科で学ぶ意味もここにあります。」

第二の「社会主義」について、大内先生は、社会主義を研究する学者となった経緯、出会った恩師や本、1980年以後の毎年の訪朝、朝鮮で出会った人々、朝鮮半島を考える際に学生や社会への問いかけについて語りました。日本で政治家が掲げる「普遍的価値」、「既存の国際秩序」とは何か。異文化理解とはそこに疑問を持ち、立ち止まって考えることと訴え、「中国や朝鮮は共産党の独裁国家である、自由や人権、民主主義は存在しない」とステレオタイプの見方しかしないので

は相手を正しく理解できないと強調しました。学生に対する大内先生の言葉をもう一度ここに掲げましょう。

「皆さんが生まれた時には「社会主義」はすでに「死語」となっていました。皆さんは今日まで「資本主義」が唯一絶対的な「価値」という社会の中で生きてきました。現実の社会主義国家は否定的側面を相当に抱え込んでいました。現存の社会主義国家にも多くの問題があります。だからと言って「社会主義」の思想・理念まで否定されるべきでしょうか。多くの人はその思想・理念すら知らずに「現象」を見るだけで否定してしまうのです。皆さんには現象にとらわれることなく、本質を見抜く力を持ってほしいと思います。」

講義の最後に、大内先生は尹東柱（1917-1945）、荻原慎一郎（1984-2017）、茨木のり子（1926-2006）の詩をいくつか紹介し、若い学生に励ましのメッセージを送りました。

最後に講義を受けた学生の感想を紹介することにします。manabaに寄せられたコメントからの抜粋です。名前は省略しましょう。

「先生の人生の一部でもあろうと思うこれまでの研究の歴史を知ることができ、非常に良い講義でした。自分はいろいろあって6年目なのですが、おそらく先生の授業は初めてです。……今期、すべての単位を取れば自分も晴れて卒業することができます。……会社に入り働こうと思っています。先生のように自分が定年退職したときに、自分の軌跡を恥じることなく話せることを目標にしていきたいなと思いました。」

「今回の授業では、ひとつの事を知るための努力と挑戦の大切さを知ることができた。今より中国や朝鮮との距離が物理的に近くても、政治的、精神的な面においてはまだまだ遠かった時代に、先生や周りの方々は訪朝し、現地の方との交流を大切にしてきたことがよく分かる。その交流を大切にすることは、配られた資料の中にある、「対処する道はただひとつ、よく理解することである」という言葉通り、相手のことをよく理解することが少しでも解決の道につながるのではないかと先生らは考え、行動したのかなと感じた。

また、最後にいくつかの詩を紹介されていた中にこんな言葉がある。「何かを必死に探す事、恰好悪いことじゃないんだ。」この言葉は、今の就活を必死にしている自分たちによく当てはまる言葉であると感じ、とても勇気もらった。」



## 集中講義「外からみた日本Ⅱ」について

昭和女子大学国際学部国際学科 徐 珉廷

2011年から約7年間非常勤講師としてお世話になった関東学院大学・比較文化学科から「外からみた日本Ⅱ」という集中講義のご依頼があり、12月23日～27日まで担当させていただきました。4日間という短い時間でしたが、濃密な時間を共にした学生諸君とこのようなよい機会をくださった関東学院大学および大内先生に御礼を申し上げます。

本講義は、2名の教員によるオムニバス式で行いました。まず1日目は兪仁淑先生によるご講義で、日本と韓国の歴史上の主な出来事について、映画やドラマを題材として学び、朝鮮時代から近代史に至るまでの日韓関係を中心とした歴史について理解する時間を設けました。次の2日目～から4日目までを担当させて頂きましたが、2日目は現代社会におけるいくつかの争点（ジェンダー問題や多文化社会としての日本、貧富の差と公平性など）を取り上げ、身近な他者である韓国から見た日本社会について考えました。3日目は日本人と韓国人のコミュニケーション・スタイルについて言語行動、呼称、非言語行動について比較・対照し、4日目は認知言語学の観点から母語話者による〈事態把握〉(construal)の普遍性と相対性を理解し、日本語、韓国語、英語などを比較・対照しつつ、〈ことば〉の根底にある認知スタンス

まで踏み込んで考える時間にしました。1名の留学生が中国から参加することになり、教室での対面授業とZoomでのオンライン授業を同時進行するハイブリッド授業で行いました。約20人の教室での学生達と1名のオンラインで参加した海外の学生、相互はスクリーンを通して交流する新しい授業形式でした。

私は日本滞在期間約20年を経て「韓国から見た日本」、「日本から見た韓国」の視点で両国を見られる立場にあり、だからこそ見えてくる部分が多々あります。韓国は地理的に近いだけでなく、日本語と韓国語は類型論的に近い言語であるとよく指摘されますが、次のような点で異なります。例えば、欧米系の言語や中国語と比べ、日本語と韓国語は両方とも〈主観性〉の高い言語であることが知られてきましたが、研究によれば韓国語より日本語の方がその度合いがさらに高いです。言語だけでなく、文化、社会においても欧米対日本の図式では見えなかった日本の特徴が、隣りの国「韓国」と比べることで浮き彫りになります。

この授業で、身近な他者である韓国からの目線を通して「日本」を考察することで、履修者が常識として持っている日常的な「あたりまえの認識」を揺さぶり、複眼的でより豊かな日本観の再構築の試みの機会となれたら大変嬉しく思います。



## 中国語HSK資格試験対策講座を開催しました

本学科教員 鄧 捷

2月14日から18日に、中国語検定 HSK（漢語水平考）のための対策講座を KGU 関内メディアセンターで開催しました。この講座は毎年開催しており、今年と比較文化学科1～3年生および英語文化学科の1年生の中国語履修者を対象としました。HSKは中国政府が公認している世界共通基準の資格であり、留学・就職活動に大変有利です。毎年多くの学生が合格しています。今年度は講座の受講料および試験の受験料はともに学科負担となり、大学を通して集団で試験に応募する形にしましたので、学生にとって非常に参加・受験しやすいこととなりました。

今回の講座は参加者16名であり、多くは2級、もしくは3級、5級の受験を希望する学生です。ご指導くださったのは本学の中国語授業を長年にわたり担当している李維濤先生です。5日間の授業の様子について李先生は以下のように報告してくれました。

「1日目の午前中は、ウォームアップ と HSK 2級の過去問によるシミュレーション（1回目）。2日目、3日目は具体的に HSK 2級の受験指導。4日目の午前中は、HSK 2級の総括・シミュレーション（2回目）。4日目の午後から、HSK 3級の概説とシミュレーション。5日目は HSK 3級の受験指導、過去問による部分的シミュレーション。また、実際に受験当日の流れと注意事項、受験までの1ヶ月間の過ごし方に

ついでの確認・共有を行いました。

HSK 2級のシミュレーション1回目では、既にほぼ全員が合格するほどの正解率でした。シミュレーション2回目では、確実に全員が合格ライン以上に達し、中ではパーフェクトに全問正解した学生が3名、また、8-9割の正解率の学生も多数いました。HSK 3級のシミュレーションでは、5日目最終日の正解率は、2名を除いて、ほか全員が合格ラインに達した状況でした。合格ラインに達していない2名も、後少しという様子でした。

今回は人数が多い中、参加者全員が始終真剣に取り組んでいた様子でした。休み時間に積極的に質問して来る学生も多く、5日間の集中学習でたくさん学べて確実にレベルアップできたと、受講生たちも実感できたと思います。5日目に、HSKK（HSK口述試験）のことを紹介したところ、初級なら大丈夫そうで受けてみたいと意気込んでいる学生もおりました。HSK 5級希望学生は、HSKKの中級か上級を受けてみたいそうです。ゆくゆく HSK 6級に合格して中国留学を目指しているそうです。」

今回の講座に参加した学生は3月下旬にそれぞれの級に応じた HSK 資格試験を受けます。たくさんの合格が期待できそうです。この講座は今後も開催しますので、多くの学生の参加を期待します。



## 旅行業務取扱管理者の資格取得

国際文化学部で開講されている「旅行業務取扱実務Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（野口亨先生）を履修した比較文化学科の学生が、みごと国家資格を取得しました。そこで学生本人に「旅行業務取扱管理者」という資格の概要、資格取得過程の経験、そして野口先生の授業について紹介してもらいます。

（本学科教員 小滝 陽）

### 比較文化学科2年 関野 真由

「旅行業務取扱管理者」とは旅行業界の中で唯一の国家資格であり、旅行会社や鉄道、航空、ホテルなどの観光業を目指す人は特に取得しておきたい資格です。また、学生のうちに取得しておくことで職種の幅も広がり、就職活動の際にも役立つ大きな武器となります。

試験区分としては、日本国内の旅行に関する旅行業法、約款、JRの運賃・料金計算や各都道府県にちなんだ地理問題が出題される「国内旅行実務取扱管理者資格」（以下、「国内」と表記）と、国際航空運賃や出入国に関する法令、海外の観光資源、旅行英語問題などが出題される「総合旅行実務取扱管理者資格（海外）」（以下、「総合」と表記）の2種類があります。どちらも試験は科目ごとに6割以上取れなければ不合格となるため、苦手科目を作らずに満遍なく勉強することが合格に近づく鍵だと思います。さらに、それぞれ試験内容は暗記するものが非常に多いため長期間にわたって入念な計画をして取り組むことをおすすめします。

私が比較文化学科を選んだ最大の理由は「旅行業務取扱実務」という試験対策に特化した講義が受けられることに魅力を感じたからです。この講義は「国内」「総合」とともに1年生から受講することが可能です。私も将来的に旅行会社への就職を目指して1年生の春学期に受講した後、約1年かけて勉強し、2年生で「国内」の試験に合格することができました。〔注：2021年度より「国内」対策の「旅行業務取扱実務Ⅰ・Ⅱ」は1年次秋学期から、「総合」対策の「旅行業務取扱実務Ⅲ」は2年次春学期からの履修に変更されました。〕

独学で資格を取得することは大変ですが、「旅行業務取扱実務」の講義があったおかげで苦手としていた分野についてもより深く理解することができました。具体的な講義内容としては、試験で出題傾向が高い要点を押さえたスライドをテキストに沿って先生がまとめてくださり、その後、学んだ内容の理解度を確認するための過去問を解く形式で展開していきます。私が受講した時期はコロナウイルスの影響によりオンラインでの講義となりましたが、とても充実した濃い内容を学ぶことができました。また、講義を受ける前に予習して自分が苦手とする分野を把握してから受講すると、より効率的に内容を理解できますし、復習も兼ねて学習することができるため良いと思います。

「旅行業務取扱実務」を履修すると、試験前の夏休みに任意参加による3日間の夏期集中講義が実施され、過去問を本番と同様に時間制限を設けて解く機会があります。講義が終了しても試験直前まで先生がフォローしてくださるため、とても心強かった印象があります。みなさんも資格講座を最大限に活用してぜひ資格取得を目指してみてください。



# 日本文化探訪参加記

「日本文化探訪」は、主にフィールドワークを通じて日本の文化を体感することを目的とした授業です。2021年度は関東学院大学に近い横浜市金沢区や横須賀市をフィールドとして授業を行いました。以下、授業の参加者から感想を書いてもらいましたので、興味を持った学生はぜひ参加してみてください。

(本学科教員 西尾 知己)

## 比較文化学科2年 一ツ谷 綾花

「日本文化探訪2」は、主に大学周辺地域の金沢区、横須賀市について学習しました。座学だけでなく博物館やお寺に行ったりするなど様々な体験ができたため楽しかったです。事前の座学でフィールドワーク先に関する知識が得られるため、フィールドワーク先で見たものが何かよくわからないということがありませんでした。そして、知識として知っている1つ1つをフィールドワークに行くことで結びつけることができました。また、フィールドワークでは地元の方や学芸員の方にお話を聞く機会がありました。直接お話を聞いたことで知ったこともあり、とても良い機会だったと思います。

授業内で印象深いのは朝夷奈切通（あさいなきりどおし）と軍港めぐりです。朝比奈切通は、現在通行止めになっているため、実際に見ることができませんでしたが座学の時間に写真を見て非常に驚きました。現代のように重機がなく、ノミのようなものしかなかった鎌倉時代にすべて手作業で山を切り開いたとは思えない高さや幅がある切通だったからです。実際にフィールドワークで行くことができればより印象に残ったと思います。

軍港めぐりでは、クルーズ船で横須賀港を巡りたくさんの艦船を見ることができました。艦船の近くを通るため、非常に迫力があります。軍港めぐりに参加する日によりどの艦船が停泊しているのかが異なるため、何度参加しても新鮮に楽しめると思います。軍港めぐりに参加するとアメリカ海軍、海上保安庁、海上自衛隊、一般の船を一度に見ることができ、横須賀港が珍しい場所であることを改めて感じました。

このように通常の講義とは異なる学び方が「日本文化探訪」ではできるので、ぜひ履修してみてください。

## 比較文化学科2年 石井 千鶴

「日本文化探訪」という授業は座学で知識のみ、あるいは、現地を訪れて様々な経験のみを得るのではなく、知識とそれに関連する多様な経験を相互に結びつけて身につけることができる授業です。通常の授業では、文字以外に写真や動画といったものを使って学びます。しかし、日本文化探訪にはフィールドワークも含まれているため、現物を見なければ得られないものを得ることができると思います。

私が受講した「日本文化探訪2」の内容で特に印象深いのは、金沢八景に縁のある場所と猿島の回の授業です。私はどちらも以前に訪れたことがあり、地元でもあるため知識も少なくはないと自分では思っていました。ところが、座学の時間のみでもこれまで知らなかった地元に関する知識が非常に多くあることを学びました。具体例として、能見台という駅のことは知っていてもその駅名の由来となった能見堂の場所を知らなかったこと、金沢八景の存在は知っていても、それらがどこにあるかはわからずフィールドワークで初めて訪れたこと、金沢八景駅付近が昔海だったということは知っていても、埋め立てによってかつての金沢八景の一部が今はもう見えなくなっているとは知らなかったことなどが挙げられます。

このように、すでに知っていると自分が思っていたことについても、新たな知識や体験を通じた気づきを得ることができます。すでに日本文化探訪のシラバスを読まれた皆さんも、これは知っているから受講しなくてもいいかなどと思わず、履修してみても良いでしょう。また、フィールドワークは実際に自分が体験するものなので授業のさまざまな回の中でご自身が楽しいと感じる部分があると思います。私は横須賀の軍港めぐりが特に楽しかったです。単純に授業が楽しいという点においても日本文化探訪はおすすめです。ぜひ、履修してみてください。



(写真は学生が撮影しました。)

## 海外ボランティア活動

比較文化学科の学生から、タイの山岳少数民族を支援するボランティア活動について紹介してもらいます。以下の文章で触れられているアカ族のコーヒーを販売する活動では、金沢文庫キャンパス購買部にも販売場所の提供という形でご協力をいただきました。この場を借りて、学科からお礼申し上げます。

(本学科教員 小滝 陽)

### 比較文化学科3年 キンデル梨瑛

私はシグマソサエティーという団体に所属しています。シグマソサエティーとは、1990年から活動を続けている伝統ある大学公認の海外ボランティアサークルです。国際ソロプチミスト横浜西様から寄付金を受け、タイの山岳少数民族アカ族の支援を中心に活動をしています。チェンライにあるアカ族の子どもたちが共同生活している寮に訪問し、現地住民の生活と文化に触れ、社会貢献を実際に体験し学ぶ「サービスマスラーニング（奉仕教育）」と呼ばれる活動から始まりました。これまでに水道工事やシェルターの建設など学生と教員が携わり活動してきましたが、現在は学生が中心となり活動を継続しています。

タイ北部の山岳少数民族アカ族は、中国の雲南省にルーツを持ちミャンマーやラオスとの国境地帯の山岳部で焼畑農業を生活の基盤としているため、5年から10数年ごとの集落移動を繰り返しながら生活しています。国境付近のため近隣諸国の影響を受けやすい治安の悪い地域です。周辺には学校も少なく、教育を受けていないことで、差別や労働搾取などの被害にあっています。

コロナ禍前までは現地に赴き子どもたちの支援をしていました。村には小学校までしかなく、高等教育を受けるためには市内に出なければなりません。山岳部で独自のアカ語を使用して生活する子どもたちは、タイ語を話せないため、高等教育を受けるためにはタイ語の学習が必須です。その語学力をサポートするため日本語の絵本をタイ語に翻訳して寄付をするなどの教育支援と文具や遊具などの物資を手渡ししていました。

現在は現地での直接的な支援活動が不可能なため、新たな支援の方法を考える必要がありました。間接的にでも支援ができないかと、日本国内でアカ族の支援をしている団体を探しました。アカ族の生産したフェアトレードコーヒーを提供している AKHA AMA COFFEE JAPAN の活動を知り、私たちは平潟祭でコーヒーを販売、その収益で子どもたちへクリスマスプレゼントを贈る計画を立てました。神楽坂にある店舗へ交渉し、販売の許可を得ることができました。コロナ感染者の急増により、当日は外部からの来場者もなく、目標販売数の半分に終わりましたが、メンバーと話し合い、構内のどこかで残りのドリップバッグを販売する方法を探しました。文庫キャンパスの購買部での販売が可能となり、SNS と教員への宣伝、口コミにより完売、無事にクリスマスプレゼントを贈ることができました。私たちが直接支援しているアカ族は、未だに貧困から抜け出せずにあります。この活動を通して、みなさんに知っていただき、持続的な取り組みができたかと考えています。



## 卒業論文・口頭試問を終えて

比較文化学科では四年間の勉強の集大成は卒業論文です。3年生の終り頃の「卒論構想発表会」、4年生秋学期10月頃の「卒論中間発表会」、12月半ばの卒論提出、2月初め頃の「卒論口頭試問」という段取りで卒業論文を完成させていきます。今年度も多くの学生が良い卒論を書いてくれました。その中から、2人に卒論執筆の感想を語ってもらいました。

(本学科教員 鄧 捷)

### 比較文化学科4年 永井 遥子

2月2日、卒業論文口頭試問を終え、卒業論文の全工程が終了した。昨年4月から卒論作成に取り掛かり、早10ヶ月。あっという間の10カ月間であったが、私が大学生活4年間で学び、研究したいと思ったことを卒業論文『日韓の大学生が直面する就職難—働く環境の選択肢—』に記すことができ、満足している。

日韓の就職問題を卒論のテーマに決めたきっかけは、ゼミナールや大学の講義を通して韓国の就職問題を学び、また、自分が実際に就職活動を経験したことからである。卒論を作成する中で一番難しかったことは、韓国に関する参考文献の収集であった。新しい(最新)、かつ適当な情報、文献を求めた私は、インターネットで韓国現地にて発行、研究された資料を調べ、翻訳しまとめていった。この時、改めて大学生活4年間の集大成をしていると感じた。24000字の論文を書くということだけでなく、これまで学んだ知識や語学、文章をまとめる力等の全てを、この論文に注いでいるように感じたからである。実際、卒論を書き終えた今、満足を覚え自信になっている。

卒論口頭試問では自分の言葉で卒論、就職問題を説明し、大学での学びを証明できた。私は口頭試問を受けるにあたり、もう一度卒論を読み返し、内容理解・質問予想等に努めた。論文提出から口頭試問まで2カ月弱期間が空いたが、この期間のおかげで卒論を客観的な立場で読み、考えることができた。しかし、口頭試問当日、副査の先生から質問を受ける中では、答えられなかったものもあり、まだまだ研究する余地があると感じている。

大学生活の半分がコロナウィルスによって全く異なるものへと変わり、改めて大学という環境の重要性を感じた卒論作成であった。「卒論を書き終えられるか」という不安や焦りもあったが、乗り越え書き終えた今、不安や困難は自信になっている。4月から新社会人となるが、この思いを忘れず胸に刻み、前に進んでいきたい。



### 比較文化学科4年 小林 瑞姫

私は所属する中国ゼミにおいて、中国の歴史や文化を研究していました。ゼミでは、論語や中国の歴史や文化に関する書籍を使って中国の歴史や中国人に根付く考え方や価値観を学びました。論語を勉強する中で、論語に書かれている考え方が自分の考え方と似ていること、とても共感できる部分が多くあることに気づき、どうして中国の古い書物が現代の日本人である私が多く共感できるのか、という疑問から「日本における儒教の受容」というテーマで卒業論文を書きました。論文を書く上で意識したことは、「儒教」というものを日本と中国の両国から見ることです。史料を基に述べることで、それぞれの国における儒教の変化を俯瞰的に見る事ができたと思います。また、中国と日本の両国の関係性について儒教を通してより理解が深まりました。

その結果、二月に行われた口頭試問では、研究を通して築き上げた自分なりの考えや研究の着目点をととても高く評価していただきました。発表はとても緊張したものの、この卒業論文作成を通して様々な面で成長することができ、とても達成感を感じています。

この卒業論文を通して感じたことは、自分の中にある「なぜ?」という疑問を大切にすることです。そして、その疑問に対して時間をかけて自分で調べることが教科書以上に様々な知識を得ることができ、最終的には自分なりの社会の見方や考え方を身に付けることができたことです。またゼミ活動や論文作成などの全体を振り返ってみて、自分とは異なる考え方に出会った時に、自分なりに理解する姿勢を持つことや、どのようにしたら共生できるのかということを考え続けることの重要性も学びました。異なる文化や言語、価値観が共生する現代社会において、この論文執筆を通して得た経験や考え方を、これからの私の社会人としての生活に生かしていくと共に、日本人としてはもちろんのこと、一人の人間として今まで以上に成長していきたいです。

最後になりますが、私自身は中々思うように書けなくて苦しい時期もありましたが、論文を書く前に鄧先生から言われた「きっと自分の為になる」という言葉は本当だったと実感しています。卒業論文を書く方や書くか悩んでいる方もぜひ騙されたと思って最後まで頑張ってください。

## 就職活動をふり返って



比較文化学科 4 年：山本 譲汰  
就職先：地方公務員

私は地元で就職したいと思っており、いわゆるUターン就職をしました。そのため、大学3年生になって、就活情報アプリ（マイナビやリクナビ）をダウンロードし、マイナビやリクナビが地元で開催しているイベントなどに興味のある企業、業界について知るため、積極的に参加しました。そこで、企業の情報や、社員の方の話をたくさん聞きました。社員の方に直接質問できることや「企業の雰囲気」も知ることができるので、参加するべきだと思います。もちろん、興味のある企業の中で、イベントに参加していない企業もたくさんあったので、ホームページなどを閲覧し情報を取り入れました。その他に、大学にも就職支援センターがあるので、分からないことや不安なことがあれば、積極的に利用した方がいいと思います。また、私のようにUターン就職を考えている方は、その県独自の就活支援サイトなどもあるので、そのサイトも随時チェックした方がいいと思います。

私は一般企業と並行して公務員も考えていたので、公務員試験の過去問題集などを購入し、勉強していました。公務員試験を受けるつもりでいる方は、覚えることがたくさんあるので、出来るだけ早く対策をした方がいいと思います。また、私は参加できなかったのですが、関東学院大学でも公務員試験対策講座が行われているので、就職支援センターなどを利用して、行われる日程などをこまめにチェックした方がいいと思います。

私のようにUターン就職を考えている方は、地元のニュースや出来事も、面接時に聞かれることがあるので、情報をたくさん知るために、地元の新聞を読んだり、良い意味で地元にいる友人や家族を上手く利用してください。また、就職活動の時期になると、一人暮らしの家と実家を行き来して、大変になると思うので、電車代などの金銭面も管理したり、カレンダーや就活手帳を利用して日程をこまめに確認することが大切だと思います。



右は飯田さん

比較文化学科 4 年：飯田 百香  
就職先：大手生命保険会社

私は3年生の夏休みくらいから公務員試験とSPIの勉強を始めました。当時は、「早く就活を終わらせたい」という気持ちが強かったので、早期内定を得るために直接内定に繋がるインターンにいくつか申し込みをしました。運良く大手の会社で部長面接まで残ることができたのですが、そこでトラウマになるほどの失敗をしました。自己分析を全くしていなかったため、自己アピールの場を3分間設けられた時、言葉が急に出てこなくなりました。その日、自己分析の大切さを身に染みて感じ、この経験をきっかけに就活に本格的に取り組むようになりました。今振り返ってみると、自己分析は就活で一番時間をかけた気がします。

良いか悪いかわかりませんが、3年生の間は業界を絞りませんでした。私には業界の知識が全くなかったため、まずは様々な業界の企業説明会に出席し、知識をつけることから始めました。説明会やインターンは、コロナ禍でオンライン開催が多かったこともあり、分刻みで出席することもありました。社会人の方や、他大学の方などと話す機会が格段に増え、コミュニケーション能力も身に付きました。それから、面接のトラウマをどうにかして取り除きたかったので、少しでも興味が湧いた会社の面接は受けるようにし、経験を積んでいくことにしました。業界ごとの質問の傾向がわかってきましたし、面接相手の職位が上がるごとに逆質問をうまく使うなどして、とにかく場数を踏むようにしました。採用担当者のYouTubeを見たりもしましたし、SNSやインターネットなど、あらゆる手段を使って情報収集を重ねていきました。この期間で、自分がどのようなことに興味があって、どのような仕事をしたいのかを理解し、業界を絞っていきました。そこから内定をいくつかいただき、この会社に入社することを決めました。

就活を通して学んだことは、失敗は決して無駄にはならないし、いい経験をしたとポジティブにとらえるということです。ただし、その失敗が本当にいい経験だったと言えるかどうかは、その後の行動次第だと思います。何事も行動あるのみです。頑張ってください。

## 卒論構想発表会参加記

2022年2月19日(土)に3年生を対象とする卒業論文構想発表会をZoomで実施しました。これから卒業論文を執筆する3年生が現時点での構想を発表し、先生方や他の学生から質問・コメントを受けて研究の糧とするためです。今年は、最終的に有志21人が発表しました。そこで、実際に発表をした3年生2人に感想をお願いしたところ、以下のように寄稿してくれました。

(本学科教員 小滝 陽)

### 比較文化学科3年 田邊 秀暁

正直言ってなぜ私が寄稿することになったのかはよく分かりませんが、代表として感想を書いておきます。今回発表会に参加したのは25人前後で、自分が所属しているゼミ以外の人の発表を聞くのは初めてでした。事前に配布された発表者の一覧表では各々の卒論の題目が書かれており、それを眺めるのは面白いです。これだけでも参加する価値はあるんじゃないかと思います。それに発表と言ってもあくまで構想段階ですし、完璧な形で資料をそろえて発表する必要はないと思います。実際私も問題なく発表を終えることが出来ましたし、来年以降参加する方もそこまで気負わずに、どのような卒論を書きたいのかを言えば大丈夫だと思います。

とはいえ、ある程度の心構えはしておいたほうが良いです。発表会では一通り自分の言いたいことを言った後は参加者から質問が出るのですが、そのほとんどは先生方からの質問でした。これは恐らくどのZoomの部屋でもそうだったんじゃないかと思います。比較文化学科は専門的な科目が多く、その分専門的な知識を持った先生が多いので、かなり多方面から指摘が出ます。私もかなりつっこまれました。1人で3つ程質問を出し、長い時間話してくる先生もいます。発表者側としてはどういう風に答えようかと考えている最中にも質問が飛んできているので大変な状況です。ですが、ここでどう答えるかを考えることが発表会の目的なのでしょうし、自身の卒論の出来を高めるには必要なものだと思います。それに、答えに詰まれば先生方から一応の解決策も出ます。このような優しい対応をされるのもきっと今の内です。2時間程度しか時間を取られずにこれだけになると考えれば、発表会には参加したほうが得だと私は思います。

最後に、私の卒論のテーマは漫画についてだったのですが、同じようなテーマで卒論を考えている方は気を付けてください。先生方によると漫画についての卒論を書く学生はよくいるらしいですが、だいたい出来は良くないそうです。漫画を読んで卒論を書けるならラッキーだと思ってましたが、そううまくはいかないです。呪術廻戦だけ読んでいても卒論は書けません。楽そうなテーマではなく、興味のあるテーマを選んだほうが良いです。

### 比較文化学科3年 渡部 香奈

「テーマは興味深いのが、個々の章ずつで内容が完結してしまっていて、章の関連性が薄い。1章から2章、3章と話が展開していくような構成だと良い。」この意見は非常に印象的でした。卒論構想発表会は自分ではなかなか気づけないものを俯瞰的に見てもらえる貴重な機会であったと思います。

私の卒業論文のテーマは「飛行機と宗教」です。具体的には『飛行機の移動から見る宗教のありかた～飛行機の開発によりグローバル化をどのように後押ししたのか～』について論じていこうと考えています。宗教について執筆したい理由は、高井先生のゼミに所属している限りこの題材について探求する必要があると感じたからです。一方、飛行機について執筆したい理由は、私は海外旅行が好きで頻繁に飛行機に乗ることが多く、移動手段の1つとして魅力的に感じたからです。しかし先生方の意見を頂き、卒論を書く上で自分の興味のあることや好きなことに偏らないように注意する必要性に改めて気づくことが出来ました。興味があるから調べるだけでは客観性に欠けてしまいます。一見すると単純そうに見えますが、実際に構成を組んでみると様々なトピックが気になってしまい、それが主観的な構想をつくり、一貫した内容になっていないなんてことがあると思います。今回の卒論構想発表会は、今後そのような基礎を忘れずに卒論を書き進める意識づくりに繋がったと言えます。

また他のゼミナールの学生からは移動手段の1つである飛行機について書く上で、他の移動手段である船や自動車、列車についても論じ、比較するべきではないかという質問もいただきました。この質問にはハッと、思うような回答が返せませんでした。とはいえ、ゼミ内発表では指摘されなかった角度からゼミ外の学生の意見が聞けるという点で充卒業論文構想発表会は複数の先生方や学生の前で発表して、言葉をもらう良い機会です。ここで得た意見をもとに構成の組み直しから再出発しようと思います。

